

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	L' Etrangerの主人公成立の一面
Author(s)	榎木, 栄一
Citation	フランス文学 , 9 : 38 - 44
Issue Date	1967-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040888
Right	
Relation	



L'Etranger の主人公成立の一面

榎 木 栄 一

1. はじめに

ある作品の成立事情を明らかにするためには、厳密には、その作品を生んだ歴史的・社会的・文学的背景を明らかにし、作者の全生活・全活動を検討しなければならないと思われます。ここでは、その限りない対象の中の一面として、具体的に現われた作者自身のそれまでの主な作品¹⁾をとりあげ、その面から、*L'Etranger* の主人公について少し考えてみたいと思います。

幸い、最近 Camus の主な作品をほとんど全部そろえることができるようになりました。特に彼の死後、*Carnets* が1962年 (I) と64年 (II) に発表され²⁾、また Pléiade 版の作品集も1962年 (I) と65年 (II) に刊行されました。*L'Etranger* 成立以前の作品について見ますと、新聞・雑誌の一部と書簡の不足をのぞいては、ほぼ全作品がそろっています。

なお *L'Etranger* は1940年5月に完成され³⁾ 1942年に出版されていますので、一応1940年までに書かれた作品に対象をしぼることにします。そこでまず、*Carnets*, I と *Caligula* では主人公 Meursault の内面的なものを中心に、次に、*l'Envers et l'endroit* と *Noces* では彼の外面的な関係を考えてみたいと思います。

2. Meursault の前身たち

おそらくアルジェの商事会社の社員だと思われる Meursault には、学生時代、海運会社などでアルバイトをしていた Camus 自身の貧しい姿を見てとることはできるでしょう。彼自身の作品で、Meursault の前身とも言える人物には、まず未完の作品 *la Mort heureuse* (écrit en 1935~38)¹⁾ の主人公 Mersault をあげなければならないでしょう。Camus のメモだと思われる *Carnets*, I の中に見られる *la Mort heureuse* の断片によりますと、その主人公 Mersault はある男を本人自身にすすめられて故意に殺害し、それによって自由な生活を送り、最後には自分も死ぬようになっているようです²⁾。この作品で後の *L'Etranger* を予測させるものとしては、*la Mort heureuse* という題名そのものが Meursault の最後の幸福感とも無縁ではないようでもありますし、また、*L'Etranger* の原稿の副題の一つに見られる *Un Homme heureux*³⁾ という言葉にも関連があるように思われます。その頃の Camus は人間の幸福、それも特に人生の終末における幸福感といったものに関心を持っていたものと思われます。その一つの解答が Meursault の最後における明晰な意識のつきつめた果ての幸福感にあるとも考えられます。

また Mersault と Meursault という名前の間の関連も見のがせないと思います。発音の上で、Mersault は mer-saut や mère-saut を、また、Meursault は meurt-saut を暗示して

いると考えるるとすれば、「海」・「母」というもものから「死」へと作者の関心が移り、しかもそれらのものを飛びこえることに関心があったと考えることも可能なことのように思われます。もしそのような連想が許されるとすれば、Meursault という名前に「死」のテーマを想像することもできると思われます。Camus は1939年に *le Soir républicain* という新聞の署名に Jeau Mersault という名前を使っているようですから⁴⁾、それらの主人公の名前は偶然のものではないように思われます。

内容の面から見ますと、*la Mort heureuse* のプランには《histoire du condamné à mort》、《mort de la mère》⁵⁾ などの見出しがあります。特に前者は Mersault が自分の心の中の葛藤を語り、死刑囚に対して司祭 (prêtre) を毎日おくるという話をする事になっているものです。後の Meursault と御用司祭 (aumônier) との対立は Mersault の心の中に生れ、彼によって書かれる事になっていました⁶⁾。Camus の作品集の pléiade 版の注釈者 R. Quilliot が《Meursault est bien le frère cadet de Mersault》⁷⁾ と言っているのもこのことに関連があるものと思われます。Mersault の殺人にははっきりした意図はあったのですが、殺人者ということでは両者は共通です。また R. Quilliot は、両者の共通の性格として、《transparence, indifférence, disponibilité》⁸⁾ という性質をあげています。両者はこのように多くの共通するものを持っていると言えるようです。しかし一方では、Mersault の行動は複雑であり、Meursault の単一的な行動は前者の一面が独立したもののようにも考えられます。前者は殺人は犯しましたが、被害者自身の自殺偽装によって事件は発覚してはいません。その彼の内面のドラマが Meursault と御用司祭との対話へと発展したものであると思われます。これらのことは小説の構成の問題ともからみあっているようにも考えられます。

La Mort heureuse はそのプランによりますと、大きくは三部より成り、その一部だけでも、*L'Etranger* の全体に相当する構成を持っているようです⁹⁾。当時の Camus にとって、それは少し大きすぎ複雑すぎて、小説としてまとめあげることが容易ではなかったのかも知れません。その一つの部 (Partie) の構成をみますと、各章の時間を現在と過去の交互にならべています。それらの現在と過去の章を別々にまとめて前後におけば *L'Etranger* の一部と二部に相当するものになりうるとも考えられます¹⁰⁾。そこで内容においても量においても大きすぎるこの小説の一部分あるいは一面を独立発展させることによって *L'Etranger* ができあがったものと考えてもよいと思われます。

Meursault の前身としては、もう一人の主人公 Caligula をあげるべきでしょう。不条理の四部作とも言える作品群 (*L'Etranger, le Mythe de Sisyphe, Caligula, le Malentendu*)¹¹⁾ の中で、この *Caligula* (écrit en 1938) だけが *L'Etranger* 以前に書かれたものです。若き王 Caligula もまた、どこまでも自己を貫きとおし、敢然と世界に立ちむかったのです。しかし彼の態度は Meursault のそれよりも一層積極的であり、より行動的です。彼の意志のおよぶ範囲は広く、その権力によって人々の行動は大きく左右されます。その意味では Meursault は王座を下り、サラリーマンとなり、消極的に行動し、没個性的状況の中に生活している

Caligula とも言えるでしょう。masse の中に没入し、没个性的な世界の中にあっても、なおまだ自己にどこまでも忠実でありつづけようとした Meursault の中に、あのはげしく狂いみだれる Caligula の現代化された姿を見るような気がします。

3. Meursault の性格の形成

1935年から38年にかけて、Meursault の前身とも言うべき人物が現われていますが、彼自身の性格の原形をなすものを *Carnets*, I によって考えてみたいと思います。そのほとんどのものが1937年に姿を現わしています。

L'homme qui ne veut pas justifier. L'idée qu'on se fait de lui lui est préférée. Il meurt, seul à garder conscience de sa vérité... (*CARNETS*, I, Gallimard, 1962, p. 46).

という、あくまで自己自身に忠実でありつづけようとした、あの性格が見られます。

さらに最後のクライマックスとも言うべき神なくして敢然と死にゆく姿も、より感情的で生々しい状態ではありますが、すでに描かれています。

Condamné à mort qu'un prêtre vient visiter tous les jours. A cause du cou tranché, les genoux qui plient, les lèvres qui voudraient former un nom, la folle poussée vers la terre pour se cacher dans un "Mon Dieu, mon Dieu!"

Et chaque fois, la résistance dans l'homme qui ne veut pas de cette facilité et qui veut mâcher toute sa peur. Il meurt sans une phrase, des larmes plein les yeux. (Ibid., pp. 49-50)

ここでは未だ、神に押しつぶされそうになり、かろうじて持ちこたえている姿です。この方が、Meursault の冷たくさわやかな最後の姿よりも、むしろ人間的な暖かさを感じさせるようです。それに、神との対立関係がより直接にとらえられ前面に押しだされています。

また全てのことに無関心・無関係であり、母の死にも動揺を見せない姿も、この頃の *Carnets* にみられます。

"Aucun rapport." Vrai roman. Celui qui défend une foi toute sa vie. Sa mère meurt. Il abandonne tout. La vérité de sa foi n'a tout de même pas changé. (Ibid., pp. 53-54).

母の死に感動も動揺も見せずに平常の生活をつづけたことが Meursault のスキャンダルの一つになったわけです。彼は自分自身に忠実であり、自分を守り通そうとただけなのだと思います。このように自分以外の何物にも無関心であろうとする人間の行動を描くことが Camus の言う《vrai roman》の目指すところであったものと思われます。

小説の順序とは逆になりますが、その同じ37年の末に、Meursault の日常生活が姿をあらわしています。

Le type qui donnait toutes les promesses et qui travaille maintenant dans un bureau. Il ne fait rien d'autre part, rentrant chez lui, se couchant et attendant l'heure du dîner en fumant, se couchant à nouveau et dormant jusqu'au lendemain. Le dimanche, il se lève très tard et se met à sa fenêtre, regardant la pluie ou le soleil, les passants ou le silence. Ainsi toute l'année. Il attend. Il attend de mourir. A quoi bon les promesses, puisque de toutes façons... (Ibid., p. 98).¹⁾

無意味な生活をその無意味なままに生きている人生。日曜さえもが無意味に流れていくだけです。ここには Meursault の日常生活の本質が冷やかな文章で述べられています。

ここまで来れば Meursault の姿はほぼできあがっています。これだけの性格とイメージが与えられれば、あとは他の人物を登場させて彼を事件に引き入れるばかりになると思われれます。

4. Meursault の老人に対する目

L'Etranger では老人たちは、いずれも暖かい目で見られていないように思われます。主人公であり語り手でもある Meursault の老人に対する目は冷淡なものを持っており、皮肉な眼差しを感じさせるようです。そこでは、若者と老人の世界には、はっきりした隔たりが感じられます。両者はそれぞれ全く別の、たがいに異質の世界に住んでいるようです。犬だけが同伴者である Salamano 老人、養老院の Pérez 老人などの、そういった異質の世界の住民としての姿は、すでに短編集 *l'Envers et l'endroit* (écrit en 1935~36) の *l'Ironie* に予告されています。

その作品の中では、得意になって昔の自慢話をする癖のある老人の話に、若者たちは関心を示そうとはしていません。

Il fut bientôt seul, malgré ses efforts et ses mensonges pour rendre son récit plus attrayant. Sans égards, les jeunes étaient partis. De nouveau seul. N'être plus écouté : c'est cela qui est terrible lorsqu'on est vieux. On le condamnait au silence et à la solitude. On lui signifiait qu'il allait bientôt mourir. (*L'ENVERS ET L'ENDROIT*, "Biblio. de la Pléiade", Gallimard, 1965, p. 18).

誰にも話をきいてもらえず「孤独への刑」を宣告された老人は、とぼとぼと立ち去ってゆきます。

Il allait maintenant, dans le doux entêtement de son pas. Il était seul et vieux. A la fin d'une vie, la vieillesse revient en nausées. Tout aboutit à ne plus être écouté. Il marche, tourne au coin d'une rue, bute et, presque, tombe. Je l'ai vu. C'est ridicule, mais qu'y faire. (Ibid., p. 19).

この冷たい眼差しは Meursault の老人に対する目と同質のものを持っているように思われ

ます。若者と老人の間には越えがたい壁が立ちふさがっています。しかし《mais qu'y faire》とつぶやくしかありません。これも不条理の壁と呼ばれるもの一つだと思われます。生と死は相いれませんが、青年は生のまっただ中にあり老年は死の世界に接しています。両者はたがいに《étranger》なのです。彼らの間には「時」以外の何ものも越えることのできない壁があります。それはまた Meursault と老人たちとの関係でもあると言えます。そして生きている街や海辺に対して養老院は死の世界の建物です。Salamano 老人の孤独それは死の孤独の姿でもあると思われます。

5. アルジェリアの若者としての Meursault

Camus の作品において *l'Envers et l'endroit* に老人の世界があるとすれば、若者の世界は *Noces* (écrit en 1936~37) にあると言えるでしょう。とりわけこの二書は冷たい文体と情熱をはらんだ文体との対極として、*L'Étranger* の文体の二要素をなしているとも言われていますが¹⁾、内容の上でも、老人の世界と若者の世界、社会の暗い死の部分と生命と自然の明るい面との対立をなしているように思われます。これはまた、*L'Étranger* の二つの側面に連らなっているとも考えられます。

その一方の面を代表する若者たちは植民地アルジェリアの都市の青年たちです。その土地の精神的風土について、Camus は

Il n'y a rien ici pour qui voudrait apprendre, s'éduquer ou devenir meilleur. (*NOCES*, "Biblio. de la Pléiade", Gallimard, 1965, p. 67).

と、むしろ否定的な判断を下しています。

また *Noces* にはその土地の若者たちに共通とも思われる性格、あるいは一つの典型とも考えられるような青年の例が見うけられます。

Il boit quand il a soif, s'il désire une femme cherche à coucher avec, et l'épouserait s'il l'aimait (ça n'est pas encore arrivé). (Ibid., p. 69).

このような青年は全くの自然性そのものだと言えます。Meursault, Marie, Raymond もこのような自然性あるいは《innocent》²⁾ といった性格と同質のものを持っていると思われます。彼らの気質を表わす典型的な風俗の一つとして考えられてもよいと思われるものに、アルジェの下町の映画館に見られる風習があります。

9) Dans les cinémas de quartier, à Alger, on vend quelquefois des pastilles de menthe qui portent, gravé en rouge, tout ce qui est nécessaire à la naissance de l'amour: 1) des questions: "Quand m'épouserez-vous?"; "M'aimez-vous?"; 2) des réponses: "A la folie"; "Au printemps". Après avoir préparé le terrain, on les passe à sa voisine qui répond de même ou se borne à faire la bête. A Belcourt,³⁾ on a vu des mariages se conclure ainsi et des vies entières s'engager sur un échange de bonbons à la menthe.

(Ibid., pp. 71-72).

こういった環境をも考えてみれば、Meursault と Marie の愛情関係も形の上では、普通の例として考えられないこともないようです。1940年以前のことではあっても、少なくとも相手の Marie の方はごく普通の立場にいる平均的な女性と言ってもいいと思われます。そして Meursault 自身もこういった若者たちと、外見的には、同じような生活をおくっていたもののように考えられます。

6. む す び

以上 *l'Etranger* の主人公の前身や原形と思われるものについて簡単に見てきました。それを作者のそれ以前の作品との関連で考えてみましたが、その前例としては Mersault や Caligula があり、老人観は *l'Envers et l'endroit* に、彼の若者としての面は *Noces* に、それぞれの原形が認められるように思われます。

このように主人公 Meursault はそのイメージのほとんどが、それ以前の作品にすでに現われていると言えるようです。その意味でも彼は作者 Camus が長い間育ててきた、作者の内面の世界に属する人物のように思われます。形式の上では、彼はまず第一にその性格と本質が与えられ、それから舞台の上に押しだされ、そこでいろいろの人や事件に関わりを持つようになるという順序がたどれるように思われます。

また、それ以前の習作的な作品を考察することによって、*l'Etranger* の主要なテーマをより具体的でより直接的な元の姿で見ることができるようになります。それは自己の意識と社会、人と神、若者と老人、などの異質な世界の対立関係と、それらが生み出す違和感だと言えると思われます。この対立関係はたがいに全く和解不可能であり、理解不可能なものでさえあります。これも Camus が不条理な関係と呼んだものの具体的な例だと考えられます。そういったものを見ることによって、こういった不条理な関係、違和感をあくまで明晰な意識をもって見つめ、ごまかしたりごまかされたりすることを最後まで拒否しつづけた Meursault の姿がより生々しく感じとられるように思われます。

〔注〕

次の作品は略号で示します。

C. I.: Albert Camus; *Carnets*, mai 1935~fév. 1942, Gallimard, 1962.

C. II.: Albert Camus; *Carnets*, janv. 1942~mars 1951, Gallimard, 1964.

P. I.: Albert Camus; *Théâtre, Récits, Nouvelles*, (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1962.

P. II.: Albert Camus; *Essais*, (Bibliothèque de la Pléiade). Gallimard, 1965.

1. 1. OUVRAGES PRINCIPAUX AVANT L'ETRANGER

REVOLTE DANS LES ASTURIES, (écrit en 1935, création collective), Charlot, 1935.

CARNETS, mai 1935–fév. 1942, Gallimard, 1962.

L'ENVERS ET L'ENDROIT, (écrit en 1935–36), Charlot, 1937.

LA MORT HEUREUSE, (écrit en 1935–38, non publié).

NOCES, (écrit en 1936–37), Charlot, 1939.

CALIGULA, (écrit en 1938), Gallimard, 1944.

LE MINOTAURE OU LA HALTE D'ORAN, (écrit en 1939), Charlot, 1950.

2. *Carnets* は1951年以後のものは未刊。
3. C. I, p. 215 参照。
2. 1. C. I, p. 24, P. I, p. 1904 参照。この作品の断片は C. I の1939年の所にも散見されるが、作品製作の時期としては、R. Quilliot の注に従った。
2. P. I, pp. 1904~1905 参照, C. I の中では R. Quilliot の要約のようには、はっきりしてはいないようだが、彼は Camus を個人的にも知っているようなので、彼の説に従った。
3. P. I, p. 1908 参照。
4. P. II, pp. 1948, 1983 参照。
5. C. I, pp. 24, 25, 26, 63, 65, 参照。
6. Ibid., pp. 24~25 参照。
7. P. I, p. 1905 参照。
8. Ibid., p. 1905 参照。
9. C. I, pp. 24, 25, 63, 65, 参照。
10. Ibid., pp. 24, 25, 63, 65, 参照。
11. C. II, p. 201 参照。M. Lebesque: *Camus par lui-même*, Ed. du Seuil, 1963, p. 43 参照。
3. 1. P. I, pp. 1137, 1140 参照。
5. 1. R. Quilliot: *La Mer et les prisons*, Gallimard, 1956, pp. 98~99 参照。
2. J.-P. Sartre: *Situations*, I, Gallimard, 1947, p. 104 参照。(《terribles innocents》)。
3. Camus が育った下町の名。